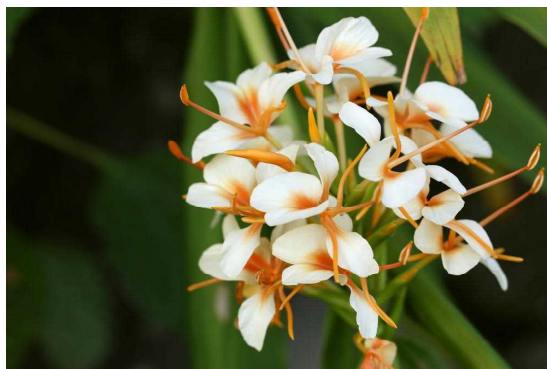


# 『今月の天候と農作業』

通巻第5570号  
8月号  
平成26年7月31日発行  
宮崎県  
宮崎地方気象台



## 【九州南部1か月予報】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

### 【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	30	30	40
降水量	九州南部	20	30	50
日照時間	九州南部	40	40	20

## 【概要】

南からの暖かく湿った気流や気圧の谷の影響で、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

向こう1か月の気温は、ほぼ平年並、降水量は、多い確率50%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並の確率50%です。

<1週目の予報> 8月2日(土)～8月8日(金)

南からの湿った気流の影響で、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報(<http://www.jma.go.jp/jp/week/>)を参照してください。

<2週目の予報> 8月9日(土)～8月15日(金)

気圧の谷の影響で、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

<3週目から4週目の予報> 8月16日(土)～8月29日(金)

太平洋高気圧に覆われ、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

## 普通作物

### ◆ 普通期水稻

---

#### 1 水管理と追肥

根の健全化のため間断灌水を行い、出穂前後は十分水を保ちます。台風襲来時は深水とし、通過後も乾燥風での生育障害を防止するため急な落水は控えます。

追肥はヒノヒカリでは幼穂の長さが1匁程になったら行います。おてんとそだちは良食味を保つために、地区基準を参考に少ない量とします。一発型の肥料を用いたほ場では施用する必要はありません。

#### 2 病虫害防除

穂いもち対策は出穂前と穂揃期頃に防除します。

トビイロウンカ（秋ウンカ）は今後増えてきますので予察情報や観察をもとに防除します。カメムシ防除は穂揃期とその10日後の2回は行います。カメムシ密度低下のための周囲の草刈りは、出穂の2週間以上前迄に終えます。出穂直前に行うとカメムシを水田に追い込んでしまいます。

### ◆ 大豆

---

#### 1 中耕・培土等

雑草対策等のため、一回目は本葉三葉期に第一節の位置まで、二回目は本葉五葉期に第三節の位置まで行います。時期が遅れると逆に根を傷めるので、開花期前までに終えます。ほ場の排水溝も埋もれないよう管理します。

#### 2 病虫害防除

ハスモンヨトウ防除は若齢幼虫時が効果的です。ほ場観察に努め、孵化直後の幼虫食害による白い斑葉（網目状の被害）を見つけたら直ちに防除します。

### ◆ そば

---

播種時期は山間地域は8月上中旬、西北諸県地域は8月下旬、沿海地域は8月下旬～9月上旬です。

排水溝を設置し、10a当たりの播種量は、条播が6kg、散播では10kg程度で、天候を見ながら湿害に遭わないように播種します。

（鎌田 博人）

## 施設野菜

8月は施設野菜の育苗開始時期となります。果菜類では、この時期の高温は雌花の着生や発達に大きな影響を与えますので、温度管理に注意するとともに、蒸散量も多いため、こまめなかん水管理が必要です。

育苗ハウスは、害虫の侵入防止対策として防虫ネットが設置してあるものがほとんどですが、ハウス内の温度が高くなる傾向にありますので、遮光資材を利用し昼間の温度上昇を防ぐことが大切です。遮光資材は、遮光率の低いものを日中の高温時に使用し、曇雨天日や朝夕には光が当たるようにすることが必要です。

### ◆ きゅうり

---

露地抑制・ハウス抑制栽培の育苗期にあたります。高温期の育苗のため、地上部の生育に対して鉢内の根量が少なくなる傾向があります。このような苗を定植すると活着不良等が懸念され、初期生育の遅れが発生します。健苗育成のためにはハウス内の温度を下げ、こまめなかん水を行います。

また、この時期はアブラムシやミナミキイロアザミウマが媒介するウイルスによって発生するモザイク病（CMV等）や黄化えそ病（MYSV）の発生に注意が必要です。防虫ネットにより媒介昆虫の侵入を防ぐとともに、定期的に薬剤防除を行います。また、ウイルス病の伝染源となる庭先での自家用のきゅうり、かぼちゃなどの栽培を控えるとともにハウス周辺の除草を徹底します。

### ◆ ピーマン

---

セル苗など若苗で定植する場合には、初期生育が旺盛になるため、基肥を減肥したり、活着後のかん水を控える等、草勢を調整する必要があります。

鉢上げを行い二次育苗する場合には、生育が進むのに伴い、蒸散も盛んになるので、日中乾燥しないように適宜かん水を行ないます。しかし、夜間多湿になると徒長や疫病発生の原因になるので、夕方のかん水や多かん水は避けます。さらに生育が進むと葉が重なり徒長するので鉢ずらしを行い、がっちりした苗に仕上げます。

### ◆ トマト

---

ミニトマトの早い作型では、下旬よりセル苗を利用したダイレクト定植が始まりますが、初期生育が旺盛となり異常茎（めがね）が発生しやすくなりますので、基肥を減らしたり、活着後のかん水を控えるなど、草勢を調整する必要があります。また、黄化葉巻病（TYLCV）対策が必要となります。

ので、このウイルスを媒するコナジラミ類の防除を徹底しましょう。

#### ◆ いちご

---

株の生育に伴う蒸散量の増加や高温により、鉢内の培土が乾燥しやすくなるため、午前中を基本に十分なかん水を行います。また、水のかかりの悪いところは手かん水を行うなどこまめな管理が必要となります。追肥として緩効性の粒状肥料等を置き肥する場合は、今月中旬までに施用しますが、極端な肥料切れは苗質に大きく影響しますので、苗の生育状況に応じて、液肥や葉面散布等による草勢管理を実施します。

(黒木正晶)

## 葉茎根菜類・いも類

#### ◆ 秋冬野菜の土づくり

---

8月は秋冬野菜の植付けにむけて土づくりを行う時期です。収量・品質を高めるには、深耕による物理性の改善、土壌pHの調整による化学性の改善、堆肥等の有機質資材の投入による生物性の改善と3つの視点で土づくりを行う事が重要です。深耕は作土層の拡大や排水性の向上をねらいに、pHは分析にもとづく石灰資材の施用、堆肥は完熟したものを用います。

#### ◆ 加工にんじん

---

播種時期となります。高台地帯では8月上旬、沿海地帯では中旬～下旬が播種の適期となりますが、にんじんは一斉に発芽させることが多収につながります。土壌が乾燥又は過湿の状態では、発芽率が低下しますので、かん水施設のあるほ場では播種前に適度なかん水を行ってから耕耘・播種します。干ばつ等で土壌が乾燥しやすい場合は播種後もかん水を行います。

#### ◆ 食用かんしょ

---

4月に植え付けたかんしょの収穫期です。生育日数が130日以上になると、いもの形や皮色が悪くなりますので適期に収穫しましょう。普通掘では秋にかけて鱗翅目幼虫（ハスモンヨトウ、ナカジロシタバ等）が多発する時期になりますので、薬剤防除を行います。

#### ◆ さといも

---

マルチ栽培の石川さといもは収穫が遅れると水晶芋や割れ芋等が発生し品質が低下しますので盆までには収穫を終えましょう。中生種では8月の土壌

水分量が収量・品質に大きく影響しますので、かん水が可能なほ場では、スプリンクラーの利用や通路かん水などを行ってください。また、今月から来月にかけてはヨトウムシ類が発生しますので防除を徹底しましょう。

#### ◆ キャベツ・はくさい

---

年末～年明けに出荷する作型の播種時期となります。育苗ハウスはサイドに防虫ネットを張り、120～150穴セルトレイで育苗します。25日前後で定植期に達しますので、本圃の準備が遅れないようにしましょう。

(河野 健次郎)

## 果樹

### 1 常緑果樹

---

#### ◆ 温州みかん

今年の温州みかんは、平年並みの結果となっています。Mサイズの果実横径は8月10日の時点で50～56<sup>mm</sup>が理想です。肥大が遅れている樹については、さらに摘果を行きましょう。

#### ◆ 完熟きんかん

今年は、6月下旬から7月下旬にかけてだらだらと開花したため、防除がやりにくく傷果などが見られます。8月下旬からは、傷果を中心とした荒摘果を開始しましょう。初期肥大を確保するため、結果確認後の施肥とかん水を十分に行いましょう。また、夜温が早く低下する中山間地域では、9月から加温が必要な園地が出てきます。早めに準備を進めておきましょう。

#### ◆ マンゴー

剪定が遅れた園や高樹齢の園では枝の発生や緑化の遅れが見られます。緑化の遅れは、花芽分化や結果に悪影響を及ぼします。葉面散布や新梢の間引きで葉に光が当たりやすくすることで、新梢の早期緑化を図りましょう。

### 2 落葉果樹

---

#### ◆ ぶどう

収穫終了後の早期落葉は、貯蔵養分の減少とともに、翌年の作柄にも影響を及ぼします。べと病等の防除を徹底し、早期落葉を防止しましょう。

#### ◆ クリ

今月から収穫が始まります。毎日収穫し、特に温度の低い朝の時間帯に収

穫することで、病虫害果や腐敗果を減らすことができ、その後の品質も良好になります。

### 3 台風対策

---

風対策としての防風ネットの点検、冠水対策としての排水溝の整備を行いましょう。

幼木や高接ぎ樹の誘引・結束も確認しましょう。

かんきつ類のかいよう病対策などで行う薬剤散布は、枝葉や果実に付着した薬剤が台風の雨によって表面に広がることで、病原菌などの発芽や伸長を抑制し、防除効果を発揮します。防除は、台風襲来前に実施しましょう。

(山口和典)

## 花き

### ◆ 夏秋ギク

---

強い日射により成長点付近の葉焼けが懸念されますので、遮光や換気、葉面散布剤の散布、かん水等の対策を実施してください。9月出荷では高温や多肥によって貫生花や扁平花などの奇形が多く発生しますので、施設内の気温をできるだけ下げするために遮光や換気等を行いましょう。

### ◆ 秋ギク

---

各作型の作業計画に応じて、育苗、冷蔵、定植などの作業を進めて下さい。冷蔵は穂・苗の貯蔵・確保と成長促進のために2～4℃で実施しますが、冷蔵期間が長期になると穂の傷みが多くなります。さらに、「神馬」系統の品種は開花遅延も懸念されますので、冷蔵は3週間までにしてください。

### ◆ ホオズキ

---

最も暑い時期の出荷になりますので、収穫後速やかに水につけるとともに、結束時に水切りを実施し、十分な水揚げを行いましょう。また、出荷終了後は、土壌伝染性のウイルス対策として残渣の腐熟処理を徹底して実施しましょう。

### ◆ スイートピー

---

品種と植え付け予定日にあわせて催芽処理・種子冷蔵を行います。種子はできるだけ充実した大きいサイズのものを選びます。吸水中に酸素不足を防止するため吸水処理は流水中で行ってください。また、吸水時の水温が低いと

発芽率が低下しますので、吸水時の水温は30℃程度に保ちましょう。

#### ◆ シキミ

---

気温が高くダニ類の被害が多い季節になります。定期的な防除で良品生産に努めてください。最も需要のある時期ですが、高温期でバクテリアが繁殖しやすいので清潔な水で水揚げを行い、出荷先で事故品が出ないように気をつけましょう。

#### ◆ デルフィニウム

---

育苗中は、定植時に本葉10枚前後に達するのを目標にかん水、施肥を行ってください。中山間地では定植が始まります。早期抽だいを抑えるためにハウス内は換気や遮光をおこない、できるだけ気温の上昇を防ぎましょう。

#### ◆ トルコギキョウ

---

平坦地では種子冷蔵終了後の夜冷育苗が始まります。発芽後は定期的に追肥を行い、苗の充実を図ります。育苗中の高温や乾燥で低温の効果が失われますので、日中は十分な換気を行うとともに、適切なかん水管理に努めて下さい。

(中村 広)

## 畜産

#### ◆ 家畜

---

暑さにより家畜の生産性が落ちますので暑熱対策を徹底しましょう。飼養密度が高いと生産性が落ちるばかりでなく、疾病の発生にもつながることから、適正な頭羽数で飼養管理を行います。家畜も人間同様、暑さだけでなく湿度にも影響されるため、気温がそう高くなくても十分な暑熱対策が必要です。牛舎周辺の雑草の刈り取りや、資材の片付けで風とおしをよくしましょう。日差しが牛舎内へ直接あたらないよう、寒冷紗を設置することも効果的です。また畜舎ファンの清掃（ほこり取り）も風量アップに繋がるだけでなく、電気代の節約にもなります。また酪農経営においては、バルククーラーのコンプレッサー清掃も冷却効率を高め、節電にも繋がりますのでぜひ取り組んで下さい。水槽やウォーターカップはこまめに清掃し、いつでも新鮮な水を十分飲めるようにしてください。

## ◆ 飼料作物

---

サイレージの2次発酵（腐敗）も懸念されます。サイレージの取り出しはできるだけ素早く行いましょう。給与時に腐敗やカビを見つけたり、通常と違うニオイのサイレージは廃棄します。トウモロコシの収穫時期になります。適期収穫を心がけサイレージ調製に当たっては十分に踏圧を行い、ビニルをすきまなく掛け嫌気発酵（できるだけ空気を入れない）するようにします。

## ◆ 家畜防疫対策

---

蚊やサシバエなどの吸血昆虫も発生しやすくなります。牛舎内の消石灰消毒は、子牛の下痢予防になるだけでなく、害虫の発生を抑える効果もありますので、ぜひ取り組んでください。防疫対策の徹底も引き続きお願いします。

（須崎 哲也）

# 特用作物

## ◆ 茶

---

これからの作業は、来年の一番茶の母枝となる秋芽の充実と、葉層や芽数の確保を図るために大変重要となります。

### 1 最終摘採と干害防止

秋芽の生育期間を確保するため、最終摘採は山間地域では7月中旬、その他の地域では8月上旬を目安に実施します。また、遅れ芽や徒長枝は、秋芽を切らないように注意して整枝します。

高温・乾燥は秋芽の生育を抑制します。晴天が続く場合は、7日おきに25～30<sup>㍉</sup>の散水が効果的です。

### 2 病虫害の防除

チャノミドリヒメヨコバイやチャノキイロアザミウマ、ハマキムシ類、炭疽病、もち病等の病虫害が発生しやすくなりますので、秋芽萌芽期と三葉期頃の2回、殺虫剤と殺菌剤を混用して防除します。

また、県内の茶園でもチャトゲコナジラミの発生が確認されました。この害虫は、茶の新芽生育期に成虫となり茶園を飛び回りますので、茶園を良く観察してください。なお、本虫に対する問い合わせや、見慣れない虫を発見した場合には、最寄りの農業改良普及センター等の茶関係機関へ連絡してください。



### 3 秋肥の施用と土づくり

秋肥は、中山間地域や寒害を受けやすい品種、幼木等では8月下旬までに、これ以外は9月上旬までに、土壌診断結果に基づき、地域の施肥基準に準じて施用します。

土壌が固く根量が少ない茶園では、9月上旬までに堆肥を1～2ト施用し深耕を行い、土づくりと発根促進による肥効率の向上に努めてください。

(佐藤邦彦)

#### ◆ しいたけ

---

夏場の高温は、しいたけの発生量への影響や品質の低下につながるため、高温対策を中心としたほだ木管理が必要です。伏込地の笠木の補充や遮光ネットの設置により、直射日光による高温障害を防ぐとともに、伏込地周囲の除伐や下刈を行い、風通しを良くしましょう。特に西日が当たる場所では、笠木の張り出しを長くしましょう。

また、害菌が発生しやすい時期ですので、ほだ場をこまめに巡回し、被害木を取り除いて隔離しましょう。

(小田 三保)

#### ◆ たばこ

---

今月は、残幹処理や夏期深耕、並びに通常期販売に向けての出荷規格確認などが主な作業になります。

1 病害の耕種的防除のため、総かぎの終了したほ地毎に残幹処理を行い、すみやかにほ地外へ持ち出しましょう。

2 夏期深耕は、スキ等により反転深耕を行い、立枯病など土壌中の病原菌密度低下や、土作りのために重要な作業となります。今年病害が出たほ地は特に念入りに行い、10日おきにロータリー耕を行うように努めましょう。

3 貯蔵害虫発生防止のためセリコは通常期買入終了まで設置し、飛来予察に努めましょう。また、貯蔵中の吸湿防止の為、全包ポリ袋梱包を行いましょ

4 通常期販売に向けて出荷包の異物、過水分、色損葉の混合などの確認を行いましょ

(松元 貴光)

## **内容の詳細について**

---

8月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

**☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。**

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

## 向こう1か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
普通期水稲	いもち病(葉)	並	<p>一部の地域で葉いもちの発生を確認しています。</p> <p>箱施薬剤を施用したほ場であっても、薬剤の効果が切れると発病することがあるので注意します。また、穂いもちについては、出穂前に粒剤を施用するか、穂ばらみ後期及び穂揃期に粉剤または液剤による防除を徹底します。</p> <p>トビイロウンカは、7月中旬に断続的な飛来が確認されました。わずかな飛来量でもその後の増殖率が高く、坪枯れ等の被害が発生するため、ほ場での発生に注意します。</p> <p>セジロウンカは6月下旬から飛来が確認されています。</p> <p>ウンカ類の第2世代の防除適期は8月下旬になると予想されます。</p>
	紋枯病	並	
	トビイロウンカ ※ (秋ウンカ)	やや多	
	セジロウンカ ※ (夏ウンカ) コブノメイガ	並 やや少	
野菜類等	アブラムシ類	やや少	<p>アブラムシ類は、わずかな発生量でもウイルス病を媒介して、キュウリやピーマン等に大きな被害を及ぼすことがありますので、育苗期からの防除を徹底します。</p> <p>ハスモンヨトウは、ふ化直後は葉裏に集合して加害しますので、この時期の発見に努め若齢幼虫期に防除を行います。</p>
	ハスモンヨトウ等の チョウ目害虫	並	
カンキツ類	かいよう病	やや少	<p>これからが本格的な台風の襲来時期です。台風による茎葉の損傷はかいよう病の発生を助長しますので、襲来前に予防散布します。</p> <p>黒点病は感染源である樹冠内枯れ枝の除去に努めるとともに、防除後の積算降水量が250mmになると次の防除が必要です。</p> <p>ミカンハダニは、今後の高温乾燥で生息密度が高まることが考えられます。高密度になると防除効果が低下しますので、発生初期段階(寄生葉率30%、1葉当たり虫数0.5~1頭)での防除がポイントです。</p>
	黒点病 ※	やや多	
	ミカンハダニ	並	
	チャノキイロアザミウマ	並	
茶	炭疽病	並	<p>炭疽病は秋芽の生育期に気温が高く、雨が多いと感染・まん延しやすいので、開葉期に防除を行います。</p> <p>輪斑病の発生は気温の高い二~三番茶の摘採後に多い傾向があります。二番茶摘採後に発病葉が見られたら三番茶残葉で多発する可能性が高いので必ず防除を行います。</p> <p>ハマキ類の防除適期は発蛾最盛期から7~10日後の幼虫孵化期ですので、多発園では幼虫の発生状況を確認して防除します。</p> <p>カンザワハダニは低密度での防除に努めるとともに系統の異なる薬剤をローテーションで使用します。</p> <p>チャノキイロアザミウマはこの時期、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくく防除効果があがらないので、残効性の長い薬剤か1週間間隔での連続散布を行います。</p> <p>チャトゲコナジラミは県内の一部地域で発生しています。成虫は新芽に、幼虫はすそ部古葉に寄生するためよく観察します。</p>
	もち病	並	
	輪斑病	並	
	チャノコクモシハマキ	並	
	チャハマキ	並	
	チャノカ	並	
	カンザワハダニ ※	やや多	
	チャノキイロアザミウマ ※	やや多	
	チャノミドリヒメコバイ ※	やや多	
	クシカケガラムシ	並	
チャトゲコナジラミ	—		
<p>1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。</p> <p>2) ※は防除情報を発表していますので、詳しくはHPをご覧ください。</p> <p>病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<a href="http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki">http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki</a>です。</p>			